頭隠して尻から物言ふ
責任回避の警視廳
二重橋事件に驚を烏と云ひくるめる
各方面に昂まる非難の聲
貴族院から警告か

二重橋事件——かつて史実否定し去つてゐる、最も陋劣ないひ草の政事の具などいふ曾つては恐らく死者が爆死前後の狀況を新聞紙上で詳細に知つた者の一團をも與へぬことではあらうが而も尚ほはあはたゞしげに調査しては却つて自ら野党を傷けんが爲め殊更に色々の人物を物色してになるかも知れぬ

貴族院では 近く何等かの形式で當局に警告するやうな事

二重橋上の不祥事件に關し警視廳では最初共犯者に必ず攻撃者が在するものと見込み

爆死者藤田
現場を目撃 した淺草千束町二の三五四鳥山方の醸業藤田ふく(六〇)同山田よし(三)藤田の知己神田東紺屋町二六火の番荒井貞次郎(外二名等を呼出し目下嚴密に取調べ中だがこれ又何等の手掛りを得る程の材料を得られさうにないので遂々

失望焦慮し・日曜にも拘らず今早朝から警官舍に關係

泊した本所小梅業平町の木賃宿砂川屋主人を初め其他同人と少しも關係あるらしきものは悉く參考人及共謀者として引致し過酸な取調べを行つて見たが何れも不得要領なので更に昨夜來飛事部、特高、高等の各課員

全部總活動
を擧げ何 關係なき儘の亀井戸町都市電働者奥野貞吉が曩日平吉の友人であ

つたといふ処から同人の家宅を捜索したる上同人を本廳に引立てた外大和民労会員中村某以下數名

引揚げて來た 女の寫眞廿餘 書類の滿た籠

うろたへたる岡總監等 各課總出て八方に飛ぶ

巡査の落度で あるは明かだ
二重橋へは一般人は入れぬ掟 夫を冒されたは警戒の巡査だ
市村皇宮警察長談

皇宮警察長市村氏は語る「私の方では平時は警手を配置してないので

責任は無い といへば無いやうであるが矢張り御警衛の大任から考へ萬一に堪へぬ次第である、權上は勿論一般人民を入れぬ事になつてゐるので警視廳と協力して警衛に當つてゐるが御承知の通り同所には

巡査がゐる のだから怪

警務部長、馬場警視部長、正力官房主事それに内務省の湯地警保局長等が加はつて該事件の善後策に關し協議を凝らした後十一時頃から捜索課と特別高等、普通高等、專門外の外事課、内鮮係員等が總動員して入口に活躍し翌朝から女の寫眞二十餘枚と外に多數書類の入つたバスケット等を押收し未つて引續き調査中であるが恐々五里霧中に入つたらしい

又復社會主義者を 暗殺せんとして襲ふ
監視中の高等視察に發見さる

十六日夜十一時半頃大杉氏を襲つた大逆遂行團三名の内數名は抜刀を以て警官を斬殺したが一方福田方では新日本社會主義擁護を標榜して暴力革命を企圖する赤旗社員や十五日出獄した許りの森の社會主義者福田雅太郎氏を暗殺しやうと斬り込んだ福田氏監視中の高等視察が發見し品川署に急報したので警官三十名が急行して

自轉車小僧の 故にする岡總監
謄寫刷になつてる上奏文 から背後の人を力説して 藤田方から押收した行季

二重橋事件につき岡警視總監は今正午官邸で各社記者と會見し説明した処に依ると「不敬漢藤田は常に新聞雜誌を讀み又は

政談演説等 を聞いた事はあるが大した教育はなかつたにも拘らず當日同人の所持して居た上奏文は文章は切々で終始一貫したものでなく新聞や雜誌の中から抜萃したものらしいが兎に角無學者であり且つ上奏文の

謄寫版で刷 つた処から考へても彼の背後に附き添つて居たものがあるらしく想はれる殊に最近研究會本部の放火事件もあつた事でもあればこの際何とかして明瞭にしておく必要があるので極力捜索に努めて居る次第であるが昨夜藤田の生前所持して居た

行李を某所 で押收した未だ手許に到着しないから中は何物が入つて居るかわからないが兎に角一両日中に判然する事と信ずる尚當日二重橋を警戒して居た日比谷署の巡査を取調た処その日二重橋附近は田舎からの

一人の小僧 が自轉車に乘つて橋に近づいて來たのでそれを制止しやうとして居る間に突然藤田が飛込んだので遽かに巡査には全然豫想がない併し大切な場所で而も英皇太子殿下の御來朝の近付で今後は二重橋附近へは角袖を配置してなるべく目立たぬやうにして嚴重警戒に當らしむる方針で

吾輩の責任 であるそこ

今早朝渋谷の某下宿屋より鳥見鳥驛生れ當時早大生葛西二郎(二)ノを拉し来り外事課の武藤警部の手許で何事か嚴重取調中であるが二重橋事件に關係あるといひ或は研究會本部の放火事件に關するものとの

早大生 一名引致
二重橋事件か 研究會の嫌疑